

養育里親

～もうひとつの家族～

10

坂口 伊都

家族が増えました

この連載を始めて10回目、2年半の年月が経過した計算になります。この夏休みから、里親委託となり、家族が増えることになりました。元気な小学4年生の男の子です。長期外泊を何回か繰り返したタイミングで、この子に児童相談所のワーカーから「坂口さんの家に住んでみない？」という話をしました。話を聞いた時の反応は、「中学になってからにする。学校を変えるの嫌」というものだったと聞いています。その話を聞いた直後の外泊は、何事もなかったかのように過ごしていました。私達の方も、いつもと同じように過ごしながら、「パパもママもお兄ちゃんもお姉ちゃんも、みんなあなたのことが大好きだからね。待っているよ」と伝えまし

た。照れくさそうに笑いながら、小さく「うん」と頷いていました。この子にとって、大きな人生を左右する選択です。言葉での表現が少ない子なので、どのようなことを感じ、思っているのかよくわかりませんが、2回目にワーカーが話をした時には「いいよ」とこちらが拍子抜けするぐらい、あっさり答えてくれたそうです。それまでに、いろいろ感じながら、ちょっとずつ気持ちを整理してくれました。決断してくれたことに感謝です。

委託当日は、この子の引っ越しの日になります。児童養護施設で、最後の別れを惜しむように、いつもケンカしていた年上の子と戯れていました。その年上の子は、この子のために施設で撮った写真をボードに飾りつけて貼って、手渡してくれました。いっぱい絵も描いてくれて、心がこもっていることがよくわかります。

でも、これを手渡す時は、ぶっきらぼうで照れくさそうな様子でした。そういうところは、二人ともよく似ているなあと思い、微笑ましかったです。

お別れの時、正面玄関に施設の皆が集まり、見送ってくれました。玄関いっぱい子どもも大人も集まり、この子にとってこの引っ越しが、とてつもなく大きな意味を持っているのだと感じました。この子の担当職員は、涙を浮かべていました。長い間、育ててくれた所です。この子にとって大切な場所です。また、こちらの生活が落ち着いたなら、訪ねに行かせてもらえますかと尋ねると、快く受け入れてくれました。車に乗り込み、窓から手を振ると、子ども達が車を追いかけて手を振ってくれました。もちろん、ケンカしていた年上の子は最後の最後まで追いかけて、大きく手を振って見送っていました。

いろいろな気持ちが入り混じりながら、家族が増えることの大きさを感じています。今回は、長期外泊ではなく、家族として受け入れる意味について考えていければと思います。

直前準備

委託の日が決まると、この子を受け入れるための準備が必要になります。事前の学校見学を経て転校の手続き、住民票を移す作業、放課後の過ごし方をどうするのかの話し合いとその手続き作業等をしてきました。そんな作業に追われながら、この子と過ごしていると、児童養護施設で過ごす自分と坂口の家で過ごす自分を無意識に使い分けている印象を受けました。スイッチを切り替えているようなイメージです。それを顕著に感じたのは、幼い頃から通っていた担当医の引き継ぎ時です。施設以外の場所で施設職員とこの子、私の3人が顔を合わせることはあまりありません。その日は出会いから落ち

着かない状態でいました。担当医が私を指さし、「この人誰？」と質問をすると、「幽霊」と答え、そんなこと言ったら悲しくなるよと言われると、うーんと考えてから「坂口さん」と答えました。家にいる時は、パパ・ママと自然に言っているのですが、誰かに改めて関係を聞かれると、何て答えていいのか躊躇するのでしょうか。改めてこの子に、「あなたのパパとママだからね」と伝えました。私達が思っている以上にパパ・ママに呼び方には、この子なりの思い入れがあるのかも知れないと感じました。

また、この子の部屋を整えるために、机や整理棚がついたベッドを買いに行きました。どれがいい？と聞くと、ベッドの下が秘密基地のようになる空間がある物を選びました。家具の発送日が決まると、とても嬉しそうにいつ来るの？何時に来るの？と何度も訪ねてきました。

ベッドが届き、部屋の配置をあれこれ試し、今ある物を片付けると、子ども部屋の様相になっていきました。この子は、ベッドの上に寝転んでみたり、秘密基地に犬を誘い込んだりして満喫しています。部屋ができると、他の家族のメンバーもいいねえ、落ち着くねえと集まってきます。客人が来ると、自分の部屋を見てもらいたくて、いろいろなアピールをしていました。そんな素直な反応を見ると、本格的に一緒に生活していくのだと実感がわいてきます。これから先、どのような生活になっていくのかと不安と、やっとな一緒に暮らせるのだという喜びの両方を感じています。

養育里親をしようと思った時は、覚悟を決めたという感覚でした。そして、養育里親をしようと思っていると語ると、夢に向かっているのですねと言われてたり、好き勝手なことをして周りに迷惑をかけていると非難されたりします。私の感覚では、どちらも当てはまりません。上手く言えないのですが、違う感覚のような気がしています。

社会的養護の場で育つ子どもと出会っていくと、家庭というこの子を手厚く養育できる環境下で育つと力が伸びるのだろうなあと感じる子どもがいます。子どもにとって、養育里親で育つことが大きな意味を持つと思うから、それができそうなら、行動に移してみようと思いました。具体的に動くためには、家族との話し合いを重ね、整理をしてという時間が要り、息子も娘も夫もそれぞれに覚悟を決めてくれたので、実行に移せました。実際に私達家族が関われる子は、一人だけかも知れません。それは、とても小さなことです。それでも、意味があることだと思うからやるだけです。

これだけの準備をしてきましたが、養育里親をしようと動き始めると非難されることも起こります。正直、養育里親をしようとして、何でもそこまで否定されなければならないのだろうと打ちのめされる日もあります。そこまで責められるぐらい、私は悪事をしようとしているのだろうかという疑念に襲われますが、責めてくる人はだいたい、詳細を知ろうともせずに攻撃をします。何か新たな事柄をしようすると、波紋のように周りが揺れるようです。子どもと生活を共にする家族間の話し合いは何回も重ねてきましたが、その家族の周辺に理解を求めるのは、予想以上の苦労が待っていました。これは、感覚でしかないのですが、養育里親の意味合いを理解しようとする前提がある人との話は、前に進んでいく感じがしてきません。ゼロではなく、マイナスからの出発です。養育里親の概要を話すと、共感してくれる人もいます。反応は、その人によって様々です。ただ、子どもは何も知らずに生まれてきただけで、何の責任もないこと、生きていく上で児童養護施設出身だと告げることで差別的な扱いを受けている子どもが実際にいるという事実を伝えると、子どもに罪はないという言葉がよく返ってきます。ですが、それでも何でも家族を巻き込んでまし

ないといけないのかと責められます。

例えば、私の実母は、何も聞こうとせずに養育里親に反対していました。聞く耳を持つまでに時間が必要なのだろうと感じていました。時間がある程度経過したある日、母から食事に行こうと誘われました。その日は母と私、息子、娘、そしてこの子の5人で食事をする事になり、この子にも声をかけていました。慣れるまでには、もう少し時間がかかるのですが、受け入れようとし始めてくれたのだと感じます。そのことを有難いと感じますし、母の行動から可能性を学びました。人が変化を受け入れるのにも、準備期間があるのでしょう。もっと養育里親が世の中に広まっていけば認識が変わるのだろうと思います。

以前に、息子も娘もこの子と一緒に暮らすことをいいよと了解して暮らし始められればいいが、それができるかどうかはまだわからないと書きましたが、我が家では3人共が家族になって一緒に暮らすことを了解することができました。この子達の覚悟に感謝です。

娘は、成り行きでこの子の引っ越しの日に児童養護施設までついてきました。本人にしてみれば、ただついてきただけなのに、お別れの日立ち会い、圧倒されていました。思わず、「来なければよかった」と口にしていました。「驚いたよね。でも、なかなかできない経験だよ。これだけ、この子にとっては大きな門出なのだね」と話すと、その言葉を嘔みしめるように聞いていました。正面玄関に皆が集まってくれた時、子どもの多さに驚いたのかも知れません。自分と同じぐらいの子、それよりもずっと小さな子ども達もいました。施設内にバラバラにいる時はそれほど感じませんが、同じ場所に集まると人数の多さに驚きます。

この子と暮らしていた子ども達も複雑な気持ちなのでしょう。それぞれに考えるところがあるでしょうし、寂しさも込み上げて当然です。

施設の職員が、「この子がいなくなることはマッチングの時からわかっていたと思いますが、実際にこの日が来ると、一緒に生活してきた子達は身を切られるような想いをしていると思います。その気持ちに寄り添っていきます」と話してくれました。いろいろな気持ちが込み上げてきます。

委託の直前には、いろいろな所が揺れました。予想していた以上に大きな揺れでした。まだ揺れ続けている所もあります。当の本人は、車に乗り込んでからもいつも通りに何事もなかったかのように過ごしていましたが、どんな気持ちになっているのでしょうか。じわじわと気持ち芽生えるのかも知れませんし、平気な顔をしているだけなのかも知れません。何にしても、大事にしなければと改めて思う瞬間でした。

名字

養育里親をしていて、必ず悩むのが子どもの名字をこの子の戸籍上の姓にするか、我が家なら坂口の通称名を使用するか否かです。子どもは、里親の戸籍に入るわけではありませんから、保険証や書類上はもともとの姓になり、変えることはできません。児童養護施設で生活していた時は、他の子ども達も生活していましたから、当たり前のように戸籍の姓を名乗っています。養子を希望する里親の場合は、今後のことを考えれば、家族と同じ名字を名乗っていくことが自然でしょう。養育里親の場合は、子どもが原則 18 歳まで、大学等に行っている場合は卒業するまで措置延長が認められるようになりましたが、いずれ独立しなければならない時期が決められています。独立すれば、通称名を使用しても、もともとの姓を名乗ることになります。そのことを考慮して、学校によっては卒業証書を通称名と戸籍上の姓の 2 種類を用意する所が

あるそうです。卒業式の間では通称名が使われ、就職の時等に不利益が起こらないために戸籍上の姓の卒業証書も用意するという理由です。

それならば、戸籍上の姓で生活を続けた方が、名前が変わらず子どもへの負担が少ないのではないのだろうかとも思います。ですがそれをする、戸籍上の姓を名乗りながら、里親宅でこの子一人だけ名字が違うことを日常的に目の当たりに暮らすこととなります。以前に、里子ではありませんが、家族の中で一人だけ名字が違う状態で生活していた方が、疎外感や異物感を抱きながら生活をしていたという話を聞き、家族として受け入れる姿勢を考えなければならぬと感じました。どのような選択をしていけば、この子を大切にできるのだろうか。どのような選択をしても、すぐに答えなど出ません。だから、悩むのでしょう。

学校に行けば、何故両親と名字が違うのかという素朴な疑問を友達から投げかけられます。私が学校に行けば、子ども達から「誰のお母さん？」と質問されます。血の繋がりがこそありませんが、この子のお母さんであることは何ら変わりありません。

この子には、坂口のメンバーは皆、あなたを家族として迎えたいと思っている。坂口の家にいる間は、同じ姓でもいいかと尋ねました。すると、「いいよ」と答えてくれました。それは、とても簡単に言っているように聞こえてきます。その後「今の姓もあなたのお母さんの大切な名前だから、両方の姓を大事にしていこうね」と話しました。この子にとって、わかりにくい難しい話なのだろうと思いますが、ちゃんと伝えたい事柄です。

当たり前ですが、この子の持ち物には戸籍上の姓が書かれています。夏休みの宿題も同様です。それを、どのように坂口に変えていけばいいのだろうか悩みます。どうしても、戸籍上の姓を修正ペンで白くしたり、二重線で消したり

する気持ちになれません。別表紙を新たにつけ、そこに坂口と書きました。学校に行く前に、この子と名前についての話を少しだけしています。今は、坂口の名前になることを楽しみにしてくれているようです。これから先、里子だと言って回る必要もありませんし、必要以上に里子であることを隠す必要もありません。私達が、お互いに家族としてぶれないことが大事なのでしょう。今も将来も大事にする選択ができればと思っています。

家族と一言で言っても、形は様々です。ステップファミリーや養子縁組も血の繋がりが無い親子です。血の繋がりが無い親子だからと言って卑下する必要はなく、そこで悩み続けることにあまり意味があるとは思えません。夫婦にも血の繋がりはありません。それでも大切な家族にも成り得るし、破滅の関係に至ることもあります。夫婦も親子も家族もお互いに押したり引いたりしながら、作っていくものです。この子との関係も作っていけばいい。とても幼い子どものような行動も見られますが、これも関係を作っていく過程なのかなと思うと、まあいいかという気持ちになります。

実際に学校に行ってから、自分の名前を坂口と言えるだろうか。坂口さんと呼ばれて、返事ができるのだろうかと心配は尽きませんが、一步一步進んでいけばいいのでしょう。

最後に

この子との生活は、本当に始まったところです。部屋にこの子の物が溢れている状態を見ると、「あー。一緒に住んでいるのだなあ」と感じます。2匹のミニチュアダックスフントも、この子を受け入れているようです。すぐに抱きにくるこの子から逃げたり、尻尾をふったり、抱かれてくつろいだりしています。

まだ、生活リズムがどのようになるかも想像が付きません。感覚としては、長期外泊が続いているかのようです。今回は、生活リズムがだんだんつかめているかも知れません。学校、放課後をどのように過ごすか、試行錯誤している最中です。この子も私達も生活の見通しが早く持てるようになりたいです。

この子は、父が帰ってくると、嬉しそうに待っていましたという様子で近づいています。「パパとお風呂に入る」「パパと寝る」と言って、すっかりパパっ子です。ママとお風呂入るのは嫌なお？と聞くと、ううん、そんなことないと言いながら、お風呂でする水鉄砲がしくて仕方ないと訴えます。私と入る時は、ママに水鉄砲かけないでと言っているの、面白くありません。何気ない日常が繰り返される心地よさを感じます。

その一方で、初めて見るこの子のアルバムから、一緒に過ごしていなかった時を知ります。この子が赤ちゃんだった時、私は何をしていたのかなと思います。仕事で何度か訪れたことがある児童養護施設なので、将来こんなことになるとは思わずに挨拶を交わしていたかも知れません。縁とは、不思議なものですね。

養育里親をしていこうとする両親にそれほど気持ちの余裕があるわけではありません。自分の子どものこと、我が家に来てくれようとしている子どもを護れるように考えるだけで精一杯です。自分達の思い通りに事態が動くわけではありません。周りの支援者達と何回も話し合いを重ね、この子にとって生活の場所を変える時期をいつにしたら、負担が少なくて済むのかを考えました。お互いにでき限りのことを協力してきました。この子にとってどうなのかを一緒に考えられる輪の存在は、里親にとっても子どもにとっても大きな支えになっています。